

# 塗装工場、建材市場を訪問 中国インターンシップ体験レポート

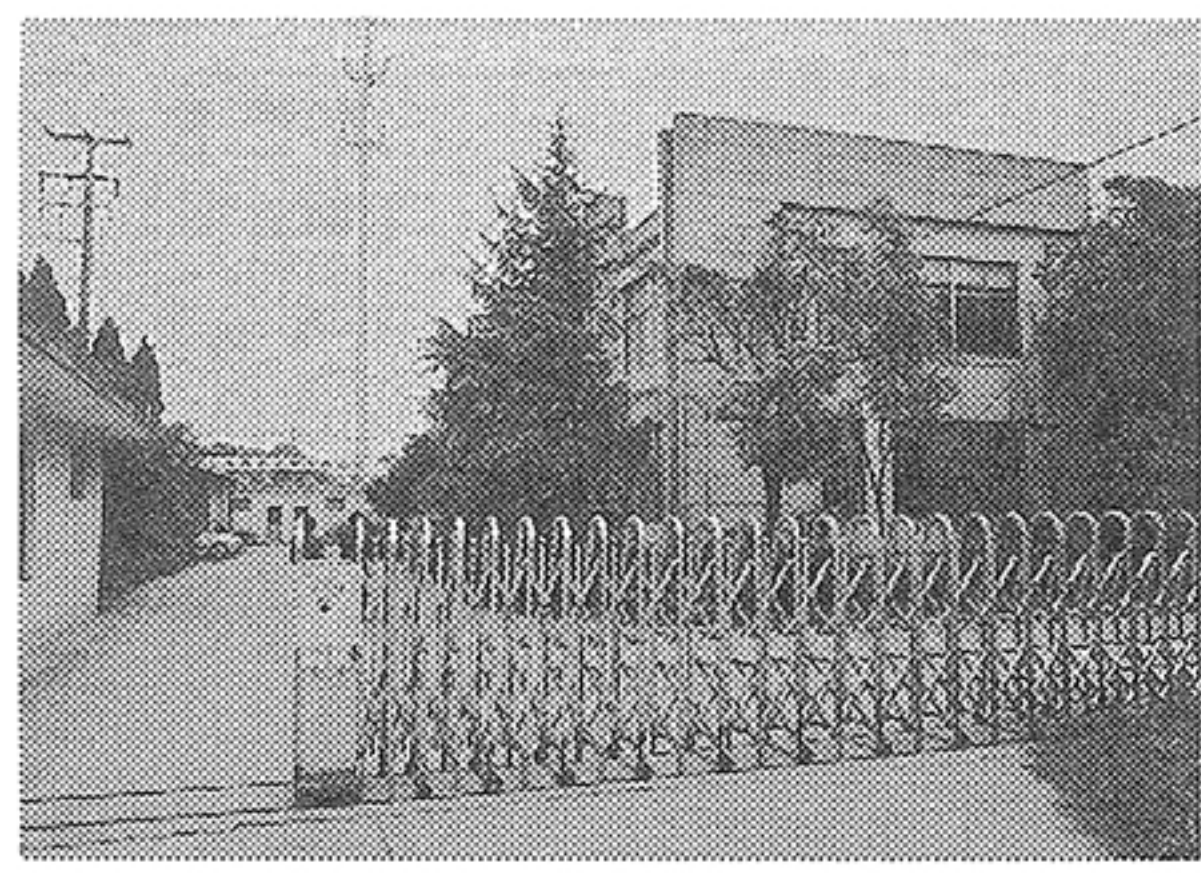


5月17日から2週間、ヤブタ塗料の現地塗装工場・上海真鶴塗装有限公司で行われたインターン研修に参加した。関西から参加した塗料販売店の若手社員2人と一緒だ。日本品質を武器に受注を増やす一方で、人件費の高騰、環境規制の強化など、事業環境は刻々と厳しさを増している。中国の“今”をレポートした。(青木)

## 3K職場に人材不足

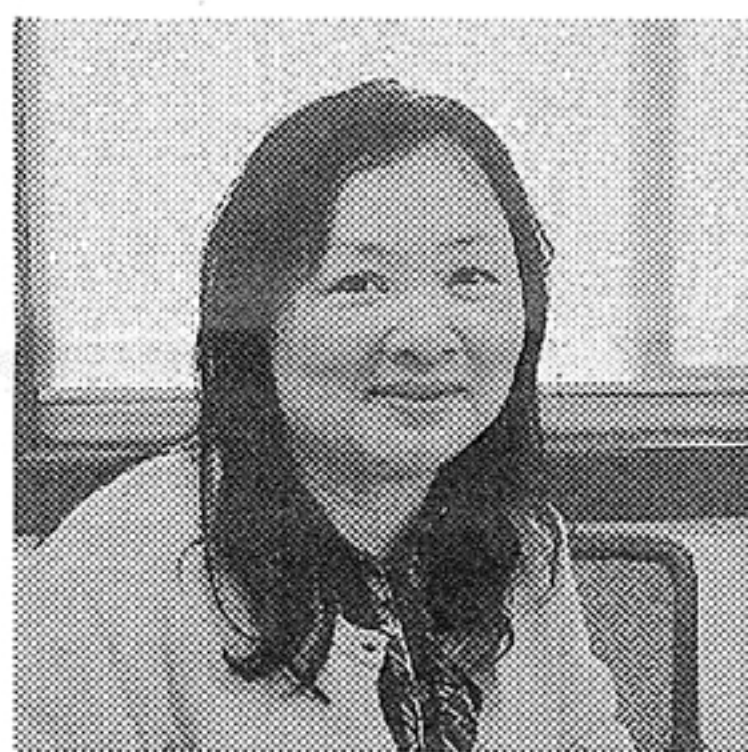
ヤブタ塗料(本社・神奈川県小田原市、社長・藪田直秀氏)は3年前から学生向けのインターンシップを実施している。受け入れ先は、中国の上海にあるグループ会社、上海真鶴塗装有限公司。「学生の就職先で人気なのはIT業界などが、ものづくりに関心がなくなっていることに懸念を感じる。しかし、身近にある製品がどんな工程で世に出るのか知ることは重要。就職活動をする上で、現場で働いた経験は彼らにとって役に立つ。インターンを契機に学生にはものづくりの現場を体験してほしい」とインターンを始めた経緯を語る。

今回訪問した上海真鶴塗装は従業員約100名、約1,800㎡の敷地を持つ塗装工場で、主に日系企業をユーザーに抱える。塗装ラインは2ラインあり、Aライン



上海真鶴塗装有限公司外観

は主にパソコンなどに使われるファンを塗装、Bラインでは地下鉄の自動ドアに使用されるステンレスの塗装に特化して行っている。その他3つのパッチ型塗装設備があり、品質要求の厳しいものやクリヤー塗装を行っている。



総経理の肖君氏

同社の顧客は日系メーカーが多いが、最近ではドイツやイギリス企業からの発注が増えているという。総経理の肖君氏は「約80%の顧客が塗装のことを知らずに訪問してくる企業。残りの20%は他社でうまくいかなかった企業。最近はこの20%が少しずつ増えてきている」と話す。

品質とコスト対応力を強みに着実に受注量を伸ばす中であって、課題に挙げるのは人材不足。中国国内にも塗装はいわゆる3K(きつい、汚い、危険)とのイメージがあるため、人が集まりにくい状況。そこで同社は自社の工場で働く作業員の家族や親せきを雇うことで労働者を確保している。「例えば、夫にスプレーマン、その妻に品質検査をさせる。家族の方が意見を細かいところまで言いやすく、納得するまで話し

合える」(肖氏)と説明する。

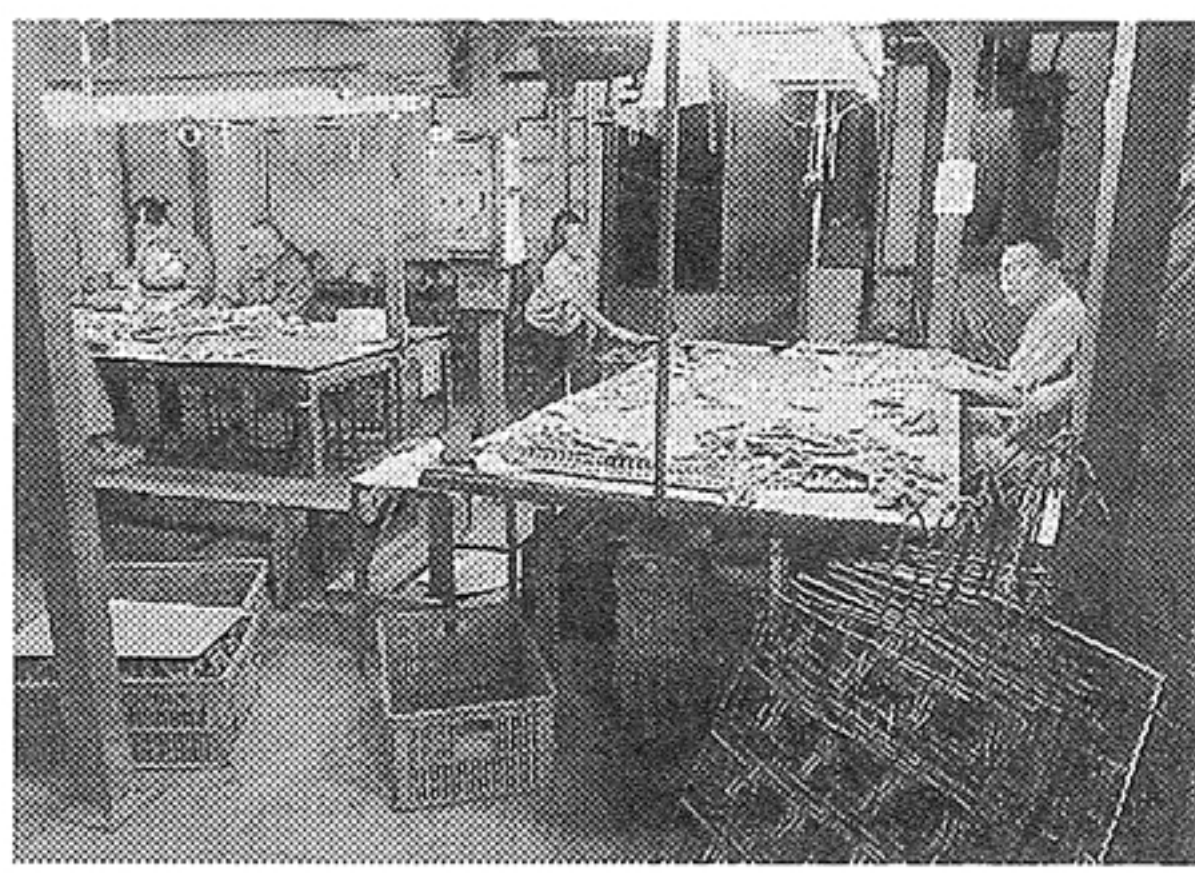
今後の課題は環境に配慮した工場を目指すこと。「中国では水性塗料を使用しているところは少なく、溶剤系が圧倒的。環境に配慮した塗料を使うことで塗装の地位向上を目指したい」とコメントした。

## 工場での作業を体験

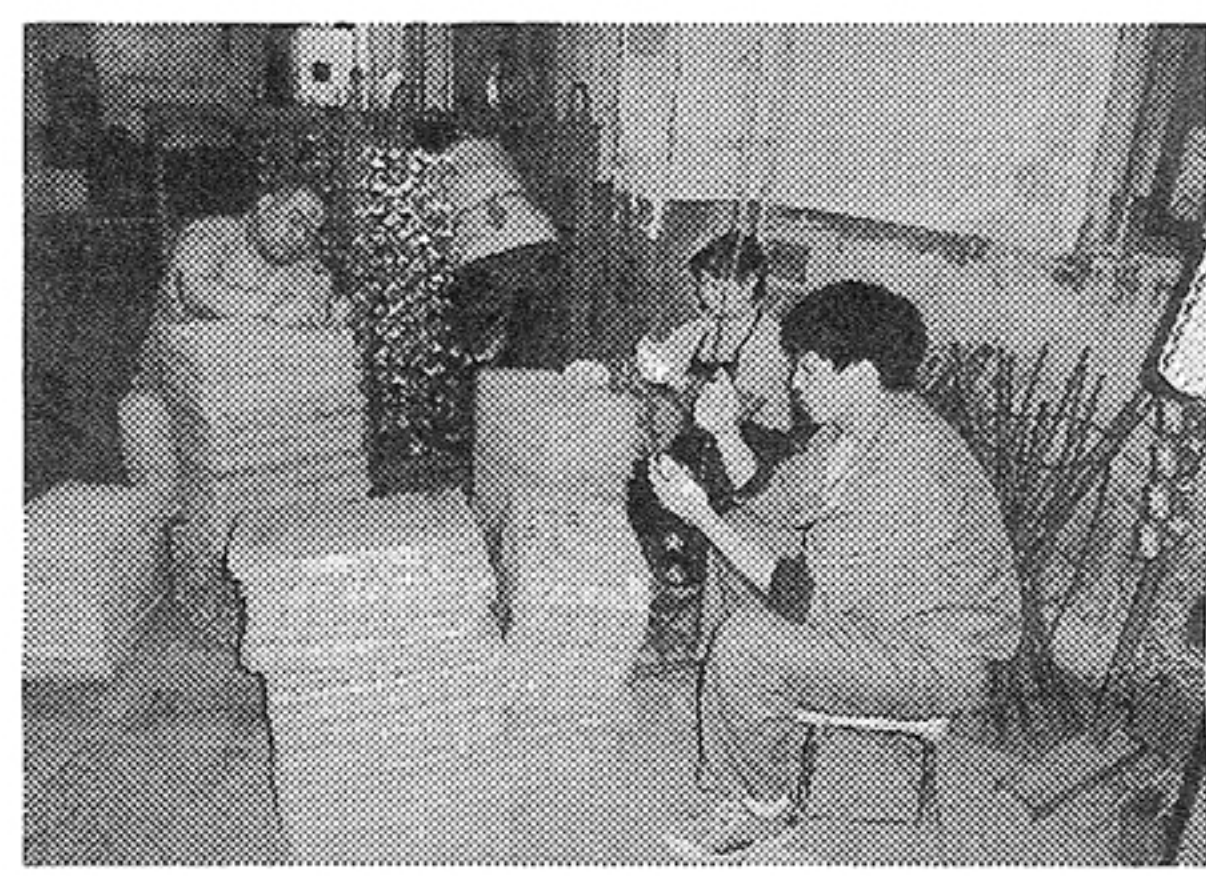
工場での勤務は、8時半から16時半まで。作業は主に前処理前のワークをハンガーに付ける工程を担当した。

鉄でできた縦横10cmほどの機械部品を鉄の囲いの中に入れていく。作業者は①ワークを鉄の囲いに入れる②段ボールからワークをとり、それを渡す③段ボールをまとめる作業、と大まかに3つの作業に分担して行った。私は現地の作業員の様子を見様見真似で行った。

また、6~7cmほどの鉄のプレートを手ハンガーに掛ける作業も行った。プレートに空いた小さな穴に治具を差し込んでいく。細かい作業のためとても神



作業風景



ハンガーに部品を吊るす

経を使う。鉄粉で瞬く間に手袋が真っ黒になった。

ハンガーに掛ける以外には、皆で仕事を協力して行う流れ作業もあった。

段ボールから製品を出す(1人)→サンダーで研磨する(1人)→製品を治具にかける(2人)の工程。私は段ボールから製品を取り出す作業を行ったが、効率よく箱から取り出さなければ作業が止まってしまうため必死だった。製品自体は重くはないが、淡々と続く作業に体力をすり減らした。

休憩に入ると、一緒に仕事をしている現地の作業員に話しかけられた。当初、中国語のカンペを用意していたのだが、聞き取ることができないため、当然会話にならない。どうにか拙い英語で答えようとしても英語が通じない。困ったのは「OK」が通じないこと。これにはカルチャーショックを受けた。

ハンドサインの違いも体験した。作業中、作業員の1人が両手の人差し指をクロスし「X」を出した。私はNOを意味するものと思ったが、どうやら違うらしい。後に調べてみると「X(バツ)」

ではなく、10を意味することが分かった。結果的には、このワークを10個ハンガーに吊るせという意味だった。

ワークをハンガーに吊るす作業は基本的に長い時間座って行うものかと思っただが、製品の入替えやサンダー掛けなどめまぐるしく変化するため、ついていくのに必死だった。



調色機が並ぶ店もある

ースがある店もあれば、一斗缶を詰んだだけの倉庫のような部屋に機が1つだけある店まで形態はさまざま。調色機がおいてある店舗もあった。

更に足を進めると商品である街灯にエイジング塗装をしている店を見つけた。黒いポールに塗料を塗り、仕上げていた。

扱っている塗料メーカーとしては「立邦塗料」の看板が至るところで見られた他、「DULUX」(アクゾノーベル)も目についた。日本と異なるのは、金粉が入った塗料が売られていること。中には金の色見本板まで置いてあり、色彩に対する嗜好の違いを知った。中国は金色を好み、内装分野で使われることが多いという。

この他、中国の現地塗料メーカー・華潤塗料とディズニーがコラボレーションした塗料が売られていた。子供のために環境の良い部屋を作りましょうというもの。富裕層は子供の教育にとっても熱心という話を聞いたが、色彩教育の面から塗料メーカーが色の効果を訴求している点が興味深かった。

## 厳しさ増す環境政策

中国では今年2月にVOCを対象にした環境規制法が施行された。VOC排出量が420g/l以上の場合、4%の消費税がかかる。値上げに踏みだしているところもあるが、多くの企業はまだ様子を見ている状況だという。

ある日系塗料メーカーの担当者は



金の色見本

「法律で決まってしまった以上こちらでも環境に対応した塗料を製造していかなければならない」と話した。

また、昨年中国国内では環境に関する法律が定められている。排水、排気ガスなどに含まれる汚染物質の規制値を1等級から3等級まで3種類に分け、規制値を決めている。物質ごとに数値が決められており、その数値は工場の立地によって決まる。例えば海や川に近い場所ではより規制が厳しくなる。「以前にも増して製造業に対する締め付けが厳しくなっており、今後も続くと思われる」(中国の塗装専門家)。事業環境における厳しさが増している。

ある塗装専門家は「いろいろなメディアでよく『中国から撤退』というものを目にする。実際は再編、縮小は少なくないだろうが、完全に撤退する可能性は低い。中国の13億人という市場はどうしても無視できないものだ」と話す。日系企業のみを顧客としている現地法人においては、顧客の動向に伴い撤退も視野に入るが、建設した工場が無駄になるという問題がある。日系依存から地場需要も取り込んでいくことが重要となっている。

中国にある日系企業の取引相手は現地日系企業77.6%、地場企業52.1%、地場外資系企業27.9%(複数回答)。しかし、今後はそれぞれ64.1%、73.9%、43.4%(数値はJETRO調べ)と将来的には地場企業の需要を取り込んでいきたい考えだ。

しかし、現地需要に対する参入のハ

ードルを高めているのが与信管理の面。中国では「支払いを遅らせることが良い経理担当者の条件」という慣習がいまだに根強く残っている。催促し、裁判まで持ち込んだとしても相手に支払い能力がないと時間だけ浪費してしまう可能性もある。

まずは現地での地位確立がポイント。地域の雇用を生み出し、貢献することから次のステップに進むことができる。

## インターンを経て参加者の感想

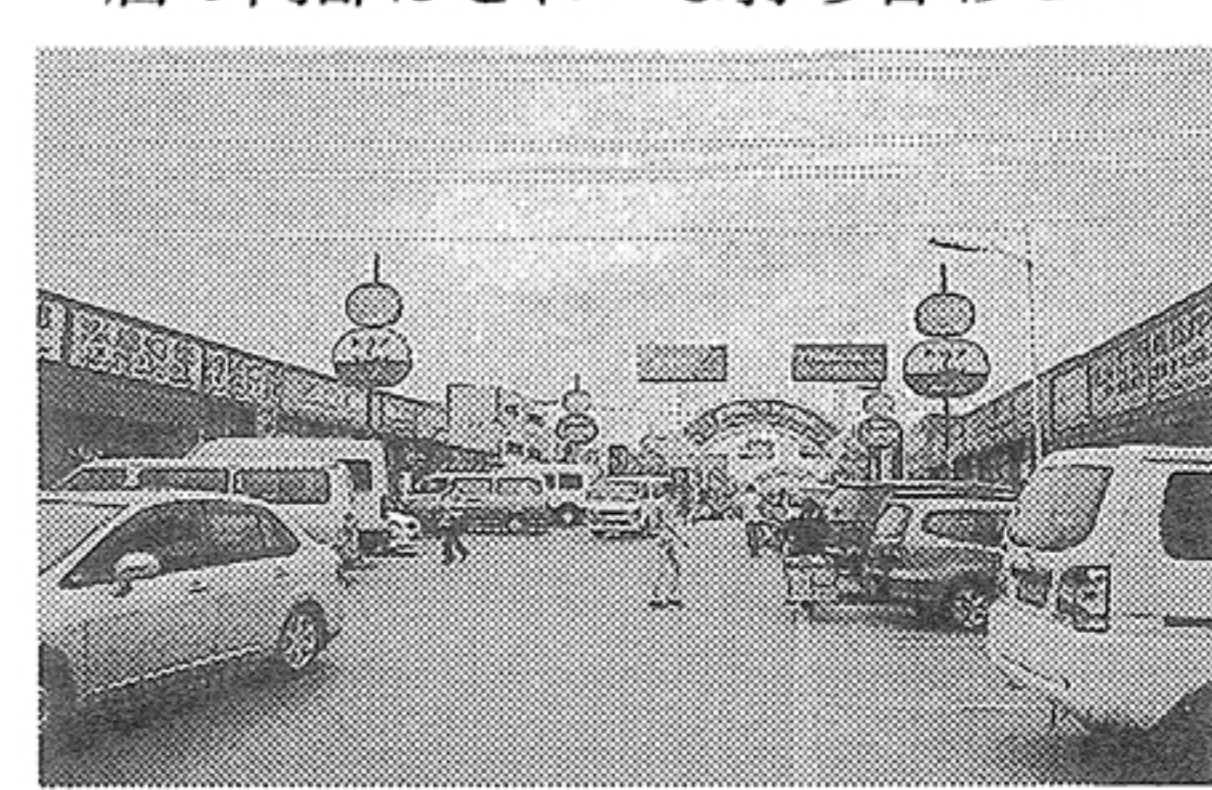
工場ではまだ手作業で行われている部分が多いが、人件費も向上しており、これから効率を求めた機械が導入されていく過渡期なのかもしれないと感じた。普段は建築汎用の塗料を扱っているが、この体験で、工業塗装にも興味をわいた(販売店・A氏)。

反日のニュースをテレビなどで見て、中国に良いイメージはなかったが、実際にコミュニケーションをとってみると気さくでとても打ち解けやすかった。少しずつでも日中の溝が埋まればと思う。工場では不良品の研磨作業を行っていたが、工場での業務を経験したことで完成品の見方が変わった。(販売店・B氏)。

工場での勤務は、言葉は通じないが、同じ仕事をしている作業員が気にかけてくれて、とても有意義な体験だった。土地の使い方に関しては、ショッピングモールや建材市場などどれをとっても規模が大きく圧倒された(青木)。



エイジング塗装の場面に遭遇



建材市場